
2015 年度
主要研究活動 概要



仏典翻訳研究会 2015 年度第 1 回研究談話会
2014 年度沼田智秀仏教書籍優秀賞受賞記念 エリック・ブラウン博士学術講演会

“The Many Lives of Insight :
The *Abhidhamma* and Transformations in *Theravāda* Meditative Practice, Past to Present.”

「洞察(インサイト)をそなえた多くの命(生命):
過去から現在に至るアビダンマとテーラワーダ瞑想行の変容」

❖ 日本語概要 ❖

❖ 講演のポイント ❖

インサイト・メディテーションあるいはマインドフル・メディテーションは、洋の東西を問わず、現代仏教において大変注目されている。仏教の三蔵の一つであるアビダンマ(論)とインサイト・メディテーションとの関係、聖と俗との関係について講演がなされた。

❖ 講演の概要 ❖

インサイト・メディテーションは、多くの人々の生に大変大きな影響を与えるものである。この瞑想の形成あるいは再構成において非常に大きな影響力を持った人物が、レディ・サヤドゥ(1846~1923年)と、パオ・サヤドゥ(1934年~)である。ミャンマー出身のこの二人の僧は、上座部仏教の哲学的テキストであるアビダンマと瞑想をうまく結びつけていった。いわばアビダンマは、マインドフル革命の基礎となっているものである。

アビダンマは、この世界を四つのカテゴリー、つまり一つの心(citta)、52の心所(cetasika)、28の色(rūpa)そして一つの涅槃(nibbāna)に分ける。一般的には、このアビダンマは、少数のエリート僧のみにとって重要なものとされてきた。しかし、レディのわかりやすい著作のお陰で、「雨のように」アビダンマは大衆に広まった。レディは、アビダンマと集団瞑想を結びつけていった。

これまでの誤りを次々と正していったレディによるアビダンマ解釈に関する著作は、非常に過激な論争を生んだ。当時、ミャンマーは、イギリスの植民地下にあり、人々は国と共に仏教も無くなるのではないかと心配していた。ミャンマーの仏教にとっての最前線の

砦であるアビダンマ解釈の誤りを指摘するレディは、反仏教者のようにも見られた。しかし、レディによって、人々のアビダンマに対する関心が高まったのも事実である。

レディは、アビダンマ研究に基づいた瞑想の方法を広めていった。また、難解なアビダンマの核心を老若男女問わず、容易に分かるようにと、韻文詩を作成したりもした。レディは、その生涯においておびただしい数の著作を執筆し、学問と実践の関連について詳細に述べていった。また、彼は瞑想法を説明するためにもアビダンマの概念や用語を使用した。具体的には、心を鎮める精神集中(samatha 止)を飛ばして、いきなりインサイト(vipassanā 観)へと向かう瞑想である(古典的には、シャマターヴィパッサナーの順番が勧められている)。

一方、パオによる瞑想へのアプローチは、深い集中すなわち禅定(jhānas)を修養することを強調する点において特徴的である。それは、いわばレディの瞑想においては省略されるものである。

またパオの瞑想は、未来に注意を投影する点に特徴がある。多くの僧が、未来のような非現実的なものは理解の範囲を超えていると批判したが、今では彼の弟子たちによって、よりわかりやすい形で、受け容れられている。

❖ ま と め ❖

現在、多くのアメリカ人の仏教指導者は、瞑想に対して精神療法的なビジョンを持っている。また科学や心理学、神経学に仏教瞑想が結びつけられる傾向が見られる。つまり、世俗的なマインドフル革命なるものが流行っている。レディとパオからの展開は、最終的に、このような世俗化された「ポスト仏教」へとたどり着くのかもかもしれない。仏教と世俗主義との関係を見直し、仏教が今後どのような軌道をとって進むのかを探求することが必要である。

❖ 英 語 概 要 ❖

❖ Summary ❖

“Insight meditation” or “mindful meditation” currently attracts great attention from many Buddhists in various countries both in the East and West. Dr. Erik Braun, an expert of Buddhism in Myanmar, explains the relationship between Abhidhamma, one of the “three treasures,” and insight meditation, and between the ‘sacred’ and ‘secular’ in contemporary Buddhism.

“Insight meditation” has a significant influence on the lives of many people. Prominent figures

who largely contributed to the formation or reconstitution of this meditation technique are Ledi Sayadaw (1846-1923) and Pa Auk Sayadaw (1934-). These two Buddhist monks, born in Myanmar, skillfully combined the Abhidhamma with “insight meditation.” In other words, the Abhidhamma is regarded as the foundation of their mindful revolution.

The Abhidhamma consists of dividing the world into four different categories, of which there are 82 dhammas in total. The first category is 1 consciousness (*citta*), next is the 28 physical factors (*rūpa*), next is the 52 mental factors (*cetasika*), and finally the 1 dhamma of *nibbāna* / *nirvāṇa* / or awakening. Generally speaking, before Ledi, only a handful of elite Buddhist monks regarded the Abhidhamma as important. By means of his extensive works, however, Ledi widely spread the Abhidhamma practice among the masses “like falling rain.” Ledi crucially connected the study of the Abhidhamma with group meditation.

His commentarial works on the Abhidhamma, which attempts to identify errors in other commentaries, caused a fierce controversy which Dr. Braun calls “the great war of commentaries.” Myanmar was a colony of Britain in those days, and many people there worried that Buddhism might disappear along with their country. Ledi’s critique of the other commentaries on the Abhidhamma, a work considered to be a vital component of Myanmar Buddhism, led to him being labeled a heretic and even anti-Buddhist. However, what is undeniable is the fact that his work led to a reviving interest in the Abhidhamma.

Ledi disseminated the method of meditation based on the study of the Abhidhamma. He also made a poem through which people in Myanmar could easily understand the essence of Abhidhamma. Ledi wrote many texts during his lifetime, focusing in detail the connection between academic study and practice. In addition, he frequently used the terms and concepts drawn from the Abhidhamma in order to explain his method of meditation. Specifically, he introduces a meditation technique in which the practitioner skips “*samatha*,” the practice of mental concentration of calming the mind, and goes straight to “*vipassanā*,” the insight into the true nature of reality. (Traditionally, a practitioner completes “*samatha*” before moving onto “*vipassanā*.”)

On the other hand, Pa Auk’s approach to meditation is distinctive for his emphasis on the practice of “*jhānas*,” that is, deep concentration. Ledi omitted such deep concentration in his method of meditation.

Pa Auk’s distinctive meditation technique also requires a practitioner to see his/her future lives. Many monks argued this practice to be unrealistic and beyond anyone’s mental capacity. Today, however, Pa Auk’s view that one should observe all future lives is explained by his students in expressions which are easy to understand and more acceptable.

Today, many American Buddhist teachers believe meditation to have psycho-therapeutic implications. Meditation is frequently presented in scientific, psychological, and neurological fields. Simply put, the secular mindful revolution is popular right now. The developments from Ledi and Pa

Auk might contribute to the secularization of Buddhism or what is referred to as “post-Buddhism.” It is necessary for us to reconsider the relationship between Buddhism and secularism, and to explore Buddhism’s future trajectory.

❖ 追 記 ❖

2009年9月23日に公益財団法人仏教伝道教会とカリフォルニア大学バークレー校の間で
交わされた「沼田智秀仏教書籍最優秀賞」に関する契約書が改正された。今後、受賞者
には、授賞賞金1万ドルとバークレーでの記念シンポジウム開催に加え、龍谷大学(世界
仏教文化研究センター)での特別講演の権利が与えられる。また龍谷大学(世界仏教
文化研究センター)は、受賞者来日特別講演に関わる費用を負担する。

以上

(文責：唐澤太輔、亀山隆彦、宮地崇)

~~~~~

龍谷大学世界仏教文化研究センター設立記念講演会  
「仏教が繋ぐアジアのネットワーク～親交の架け橋～」

---

❖ 日本語概要 ❖

---

---

開会挨拶：若原雄昭氏（龍谷大学副学長、文学部教授）

時 間：13：00～13：10

---

現在、龍谷大学では第五次長期計画を進めている。その研究面での柱が、この世界仏教文化研究センターである。これまでの仏教文化研究所で行われてきた基礎的研究と、人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センターおよびアジア仏教文化研究センターで行われてきた応用的・臨床的研究を総合して、新たに設立されたのが本センターである。今後、国際研究部門・応用研究部門・基礎研究部門、それぞれが有機的に結束して仏教研究を行い、それを世界的に発信していくことが目標である。そして、仏教を基軸とした世界的な研究拠点となることを目指している。本日の講演会は、センターの最初の大きな企画であり、今後も様々な講演会などが予定されている。

※講演会開始前に、ネパール大震災で亡くなった方々を追悼して、参加者によって合掌が行われた。また鍋島氏より、大震災復興の拠点となっているカトマンズ本願寺へ復興支援の義援金が募られた。

---

題 目：「ネパールの仏教写本をめぐって—近代仏教学における写本研究とその意義—」

講演者：スダン・シャキヤ氏（種智院大学人文学部准教授）

時 間：13：10～14：10

---

---

❖ 講演のポイント ❖

---

ネパールには大量の写本が残っているが、その歴史的・文化的重要性について、ネパール大地震後の状況を踏まえて説明がなされた。ネパールの人々にとって写本はどのような意味があるのか、またネパールの写本の特徴とはどのようなものなのかについて、併せて解説がなされた。

---

---

❖ 講演の概要 ❖

---

---

現存するネパールの仏教と大量の写本について

現在のネパールにおける仏教には、大きく分けて三種類ある。一つは、テーラワーダ仏教(上座部仏教)である。これは、比較的新しいものであり、親しみやすい仏教として現在、多くの人々から支持を得ている。次に、チベット系仏教である。これは、元々は山岳民族やネワール族が中心となって形成されたものである。最後に、ネパールの伝統仏教である。これは、カトマンズ盆地のバハー、バヒーと呼ばれる寺院を中心に広まったものである。

仏教研究において、サンスクリット語の写本は、第一次資料であり、学術的に非常に価値が高いものとされている。そしてネパールに多くあるサンスクリット語の仏教写本を世界に知らしめたのが、B. H. ホジソン(1800~1894年、仏教学者、言語学者)という人物であった。

三宝マンダラ

仏教において「三宝」と言えば、仏・法・僧のことである。そして「三宝帰依」は、仏教徒としてのまさに出発点でもある。ネパール仏教では、「三宝マンダラ(仏マンダラ・法マンダラ・僧マンダラ)」の観想という、独特の「三宝帰依」が行われる。この中で最も注目すべきは、典籍を布置した「法マンダラ」(中心は『般若経』)である。この典籍群は、後に「九法」と呼ばれるようになる。このように、ネパールにおいて経典は、読誦するだけでなく、儀礼でも用いられているのである。

ネパールの仏教写本の所蔵の現状

『般若経』をはじめとする経典を写経することは、功德(息災・増益・無病)につながるという考え方が、古来ネパールでは広く普及している。そのような背景があったからこそ、膨大な数の写本が残されることにもつながったのである。ネパールにおいて、写本は、読誦の対象のみならず、本尊そのものであり、家宝でもある。写本を所蔵していることは、ネパール社会においては、一つのステータスともなっているのだ。現在、写本が所蔵されている場所は、主に四つに分けられる。

- ① ネパールのナショナル・アーカイブスや国立大学など
- ② 大学・研究機関
- ③ 地域の寺院や組織
- ④ 個人

ネパールにおいて所蔵されている写本は、梵語写本、梵語・ネワール語(カトマンズ盆地を故地とするネワール族の言語)混成写本、デーヴァナーガリー(古代インドで発達した文



---

字・言語)転写のチベット写本の三種類がある。

### ネパールの仏教写本の特徴とその意義

ネパールの仏教写本の最大の特徴は、経典・陀羅尼などをサンスクリット語原典からネパール語やネパール語などに翻訳せず、原典のまま用いていることである。写本には奥付に所有者、転写した年代、場所、目的などが記されており、仏教研究において、これらは非常に重要なものである。

---

### ❖ ま と め ❖

---

今回の大震災で、多くの写本が汚れたり水浸しになったりした。震災後、写本の修復が積極的に進められている。ネパールには、現在も、未公開の写本が多く現存しているという。写本は単に文字情報だけではなく、画が含まれていることもあり、これは図像研究にも大いに役立つものである。今後も重要な写本が新たに発見される可能性は高く、そうすれば仏教研究に大いに貢献できると思われる。

---

コメンテーター：加納和雄氏（高野山大学文学部准教授）

時 間：14：10～14：20

---

---

### ❖ コメントの概要 ❖

---

仏典の梵文写本には、出土写本と伝世写本とがある。出土写本は大変古く、破片で見つかることが多い。伝世写本は8世紀以降と比較的新しく、完全な形で残っていることが多い。写本の奥付が残っている場合、年代を確定することができるが、残っていない場合は、書体などから年代や場所を判断することになる。

かつて東インドで書かれた梵文写本は、カトマンズへ持って来られ、そしてチベットへ渡ったことがわかっている。つまり、カトマンズは、インドとチベットとの重要な中継地だったのである。

写本を所蔵している機関は、ネパール国外では、ロンドンやベルリン、日本であれば東京大学、京都大学、東海大学そして龍谷大学などである。最近では写本をインターネットで公開している機関もある（東京大学やハンブルク大学など）。

---

---

題 目：「ネパール大震災のカトマンズと本願寺の支援活動」

講演者：楠秀峰師（浄土真宗本願寺派社会部長〈災害対策〉、特定非営利活動法人 JIPPO 事務局長）

時 間：14：20～14：50

---

---

---

❖ 講演のポイント ❖

---

---

特定非営利活動法人 JIPPO による世界各地での実践活動に関して講演がなされた。また、ネパール大地震後の本願寺による支援活動の内容について、現地の写真を交えて解説が行われた。

---

---

❖ 講演の概要 ❖

---

---

JIPPO の活動

特定非営利活動法人 JIPPO（浄土真宗本願寺派の宗門長期振興計画に基づき設立〔2008 年 11 月 5 日〕）は現在、世界各国で様々な支援活動を行っている。

- ① 2009 年：寺子屋給食支援（ミャンマー）
- ② 2010 年：洪水復興支援、2013 年井戸掘りプロジェクト（パキスタン）
- ③ 2013 年（実施中）：台風 30 号「ヨランダ」復興支援（フィリピン）
- ④ 継続事業：ウバ紅茶のフェアトレードと幼児教育支援（スリランカ）
- ⑤ 継続事業：有機コーヒーのフェアトレード（東ティモール）
- ⑥ 計画中：農村芸能の復活と継承（カンボジア）

また JIPPO では、「本当の豊かさってなんだろう」をテーマに、途上国と呼ばれる国々でのスタディツアーを企画している。これは、実際に海外協力の現場を訪れ、人々と触れ合いながら「心で感じる」学びの場でもある。

JIPPO は、国外のみならず国内においても、例えば、京都市内における野宿者を訪問たり、福島県の子どもたちと夏休みに県外で野外活動を行ったりもしている。今後 JIPPO では、さらに現地の問題や現状を多くの人々の知ってもらい、宗門外の人々（他宗派や大学など）とも連携して事業を進めていくことを目標としている。

※JIPPO について（JIPPO ホームページより <http://jippo.or.jp/>）

JIPPO は、「すべての存在といとなみは互いに関係しあい支えあっている」という仏教の基本理念に則り、浄土真宗本願寺派を基盤とする NGO 組織として 2008 年 11 月に設立しました。私たちは「世のなか安穏なれ」という願いのもと、あらゆる地域のさまざま人びととの交流を深め、社会的な貢献を果たすためにその活動を推進します。ま



た、浄土真宗本願寺派にとっては、念仏者としての生き方を国際貢献や社会貢献の場に具現するため、宗教・宗門を越えた人びととの協働の場として JIPPO がその役割を果たしています。

### ネパール大地震の被害状況と支援活動

2015年4月25日に発生したネパール大地震では、8,460人の死者と2万人以上の負傷者が出た(2015年7月現在)。カトマンズ本願寺は、倒壊はしなかったものの、天井や壁にひびが入る被害が出た。鉄筋でできた建物だったため、比較的被害は小さかったが、レンガで建てられた他の建物などの被害は甚大であった。世界遺産の建築物や若者たちに人気のあった高層タワーも大きな被害にあった。空き地では、余震を恐れテントで生活している人々があふれかえっているという。そのような中、現在、NGO 団体などによる、炊き出しなどが積極的に行われている。また、義援金(助け合い運動募金)が、日本から(東日本大震災に遭われた方々からも)多く集まっているという。

---

---

#### ❖ ま と め ❖

---

---

講演では、地震後の写真が多く紹介された。52mもあるビムセンタワーが完全に折れてしまっている写真や、レンガ工場が跡形もなく崩れ去ってしまっている写真からは、被害の大きさが、まざまざと感じられた。宗派や国境を越え人として今からできることを考え続けていく必要がある。

---

---

**題 目**：「ネパール大震災のカトマンズと本願寺の支援活動」(続き)

**講演者**：ソナム・ワンディ・ブティヤ師(浄土真宗本願寺派ネパール開教地開教事務所長)

**時 間**：15:00～15:30

---

---

---

---

#### ❖ 講演のポイント ❖

---

---

ネパール大地震後の現地の復興作業の状況や学校復興支援に関する活動に関する講演がなされた。地震当日の様子からその後現在に至までの復興の様子について、写真を交えて解説がなされた。

---

---

#### ❖ 講演の概要 ❖

---

---



## ネパール大地震に関して

大地震は、土曜日の昼間に発生した。周知の通り、被害は甚大なものだった。ネパールでは土曜日は学校も会社も休みであり、人々の多くが畑仕事などに出ている。もし子どもたちが学校に行っている時間帯や夜中であつたら、被害はさらに拡大していた可能性がある。

カトマンズ本願寺には、歌手や歌が好きな方々が多くおり、そのような人々が自然と集まって、一つのミュージックビデオ(約5分)が制作された。それが今回、上映された。我々日本人の多くは、このミュージックビデオで歌われている歌詞の内容はわからない(講演会の後半で、スダン・シャキヤ氏が「歌詞の内容を一言で言えば、これ以上私たちを苦しめないで、というもの」とお教えくださった)が、そこには復興を心から願い、あきらめずに一生懸命作業を行っている人々の姿が映し出されていた。

## 仏の教えとは

「仏の教えは、いわゆる『宗教』ではなく、心の元気を取り戻すもの、心を安心させるもの」であり、それは言い換えれば「心の教育である」。また、そのような仏の教えにおいては、本来「死ぬ」という事柄はなく、みな全て浄土へ「帰る」。では、本当に浄土はあるのか。それは、はっきりと(客観的に)説明できるものではないかもしれないが、「それは、自分自身でわかるもの」だという。

仏の教えは「心の薬」である。毎日少しずつ飲んでいけば、心はいずれ元気になる。しかもこの薬には味があるという。これを飲み続けて「美味しい」と感じたときに、浄土がわかるのである。

## 学校復興支援

講演では、大地震で壊れた田舎の学校の復興支援についても説明がなされた。現在、学校までの道のりは大変危険であり、地震の影響により、いつがけ崩れが起きても不思議ではないような状態である。さらに、これから雨季に入ると地盤が緩み、山が崩れる危険性がますます高まる。このような道を経て、ノートや鉛筆などが、カトマンズ本願寺から届けられている。また、トイレの設置や水道の整備、遊具の建設なども行っている。来月(2015年8月)には、ここに、有志の龍大生数名が訪れる予定である。

---

## ❖ ま と め ❖

---

多くのネパールの人々が、一日も早い復興を願っている。現在の苦境に立ち向かうことができる人々の背景には、仏の教えが非常に大きなものとしてある。ソナム師は、ネパールを代表して感謝の意を述べられた。

~~~~~

題 目：「仏教研究の最前線～龍谷大学から世界へ～」

講演者：桂紹隆氏（広島大学名誉教授）

時 間：15：30～16：30

❖ 講演のポイント ❖

仏教研究の方法や写本研究の最前線に関する講演がなされた。龍谷大学生そして今後の仏教研究者へ向けての「期待」も併せて述べられた。

❖ 講演の概要 ❖

「仏教」とは何か

仏教とは「仏語」つまりブッダの教えのことである。現代でも、テーラワーダなどからは「ブッダが直接説いた言葉以外は純粋な仏教ではない」と、大乘仏教は批判されることがある。そうすると、浄土真宗は仏教ではないのかという疑問が浮かんでくる。我々はこの問いにどのように答えることができるであろうか。仏教学者の前田恵学(1926～2010年)は、古代インドから現代までの教えや美術、儀礼、建築物(遺跡)などあらゆる形態＝「文化的複合体」としての仏教を、全面的に肯定している。おそらく、我々日本人の多くもそのような視点から仏教を捉えているのではないだろうか。我々にとって重要な事柄は、純粋なブッダの教えのみを仏教とする考えと、「文化的複合体」としての仏教を認める考えとの間を行ったり来たりして、その在り方を深慮することである。

仏教の記録と研究方法

仏教における写本は、筆写、印刷を経て、現在ではデジタル化されるに至っている。膨大な経典の写本は、いわば「記憶装置」とも言えるものなのである。龍谷ミュージアムには、デジタル復元されたベゼクリク石窟大廻廊があるが、これは仏教史学や情報学、文献学などの協力の結晶とも言えるものである。

仏教研究とは、文献学によるものだけではなく、哲学や論理学、倫理学、思想史からのアプローチによるものもある。現在では、特に近現代における仏教思想の研究が注目されている。

また現在、仏教研究は、アジアのみならず、アメリカやヨーロッパでも盛んに行われている。その背景には、鈴木大拙(1870～1966年、仏教学者)や沼田恵範(1897～1994年、仏

教伝道者、1965年に仏教伝道教会を設立)の影響がある。鈴木は禅や仏教に関する英文著作、また沼田の発行した雑誌『パシフィック・ワールド』などは、特にアメリカの人々に大きな影響を与えた。

仏教はアジア各地から世界へ広がった。その大きな理由は、ブッダの教え(仏法・ダルマ)の中核である「縁起」には普遍性があるからでもある。

仏教研究の最前線

仏教研究においては、サンスクリット語だけではなく、古い漢訳の中にこそ大事な事柄が隠されていることがある。海外において、龍谷大学は、仏教文化研究所があることでよく知られており、特に大谷探検隊将来写本の研究は高く評価されている。2012年10月、龍谷大学は中国蔵学中心との学術交流協定を締結している。また梵語テキストによる仏典解釈の見直しも盛んに行われている。今後、龍谷大学における仏教研究は、さらなる発展を遂げようとしている。

❖ ま と め ❖

桂先生によって、龍谷大学生そして仏教研究者へ向けて四つの提言がなされた。① 海外へ留学しよう、② 国際学会で研究発表をしよう、③ 学術雑誌に英語で論文を発表しよう、④ 発表に値する研究をしよう(そうすれば、世界中から研究者が龍大に集まってくる)

コメンテーター：スダン・シャキヤ氏 (種智院大学人文学部准教授)

時 間：16:30～16:40

❖ コメントの概要 ❖

桂氏の講演を受けて、「師」「場」「資」という三つの語が示された。「師」とは、師匠・教師・研究者・指導者そしてライバルのことである。「場」とは、大学・施設・研究所のことである。「資」とは資料のことである。この三つが、仏教研究において最も重要なのである。これらは、研究成果を社会へ還元する際にも大事なものとなる。そして、この三つが見事にそろっているのが、龍谷大学である。また龍谷大学では、梵・蔵・漢に関わる事柄をまんべんなく学ぶことができる。

~~~~~

---

コメンテーター：加納和雄氏（高野山大学文学部准教授）

時 間：16：40～16：50

---

---

❖ コメントの概要 ❖

---

仏教の記録とその研究は、直筆原稿に始まり、翻刻→校訂→訳→分析・解説→思想史研究、そして応用研究へとつながる。この応用研究において十分に使用できるようにするためにも、基礎研究は非常に重要なものである。龍谷大学では、応用研究と基礎研究の両方ができる場であり、またその成果を学べる場でもある。中国蔵学研究中心やヨーロッパの研究機関と龍谷大学との共同研究は、これからますます盛んになってくると思われる。我々が目指すべきことは、仏教を介して世界を繋いでいくことである。

---

閉会挨拶：能仁正顕氏（龍谷大学世界仏教文化研究センター長、文学部教授）

時 間：16：50～17：00

---

シャキヤ氏の講演は「写本が繋ぐネットワーク」、楠師とソナム師の講演は「人と人が繋ぐネットワーク」、桂氏の講演は「研究が繋ぐネットワーク」と言い換えることができるかもしれない。我々は仏教を拠り所として、今後様々な親交(ネットワーク)を結んでいくことができるであろう。ネパール大地震における「真実の体験」を、仏典の中からも読み取り研究し、社会の中に還元していくことが必要である。その第一歩が、本日の講演会であったと言える。

以上  
(文責：唐澤太輔)



龍谷大学世界仏教文化研究センター設立記念シンポジウム  
(外務省認定・日韓国交正常化 50 周年記念事業)

「仏教を通じた日韓文化交流の歴史と展望—未来への伝灯—」

❖ 日本語概要 ❖

開会挨拶：赤松徹真氏（龍谷大学長、文学部教授）

時 間：9：30～9：35

龍谷大学世界仏教文化研究センター設立シンポジウムのために来日してくださった東国大学校の先生方及び協賛の浄土真宗本願寺派への感謝の意が述べられた。次に、本研究センター設立の背景にある龍谷大学第五次長期計画(仏教を基軸とした特色ある研究の推進、国際的な研究拠点の形成、次世代の研究者の育成、研究環境の整備)に関して説明がなされた。これまで龍谷大学は、東国大学と交換講義を通じて親交を結んできた。今後も、龍谷大学および本センターが日韓の学術・文化交流にますます貢献していくことが述べられた。

来賓挨拶：大谷光真師（浄土真宗本願寺派前門主）

時 間：9：35～9：40

浄土真宗本願寺派前門主・大谷光真師より、龍谷大学世界仏教文化研究センターの設立への祝辞を賜った。現在、仏教研究者の数は世界各地で増加し、教義からの研究だけではなく、宗教学・社会学・文化人類学などから様々な角度からの研究がなされている。このような状況の中、本センターは、大きな可能性を持っていることが述べられた。そして、仏教に関する具体的な事例・課題を理解し討議することは、未来に向かって大きな力となると加えられた。また、近代日本仏教だけではなく、過去の歴史に学ぶ姿勢も大事であることが述べられた。そして最後に、本シンポジウムを通じて、広い視野に立った日韓文化交流の歴史と展望を提示していただきたいとのお挨拶を賜った。

開催趣旨：若原雄昭氏（龍谷大学副学長、文学部教授）

時 間：9：40～9：45





今年、2004年から始まった東国大学との交流が12年目を迎え、さらに戦後70年、日韓国交正常化50周年という節目の年でもある。このように歴史的な意義に鑑みて、本シンポジウムが策定されたことが述べられた。また、本シンポジウムのプログラム構成について説明が行われた。

---

**基調講演：「韓日(日韓)仏教交流1500年の記憶と未来」**

**講演者：宗浩(朴文基) Jong-Ho 師(東国大学校佛教大学院・佛教大学長)**

**時間：9:45～10:35**

---

---

---

**❖ 講演のポイント ❖**

---

---

日本に仏教が伝来し(538年)、韓日の仏教交流が始まって1500年が経過した。古代から近現代にいたる日韓の仏教交流の歴史を通時的に概観する講演がなされた。これまで両国はどのような交流を行い、お互いの仏教研究にどのような影響を及ぼしたのかについて述べられた。

---

---

**❖ 講演の概要 ❖**

---

---

**飛鳥時代**

飛鳥時代、司馬達等の努力により、日本仏教界に戒律制度が次第に成立していった。その後、聖徳太子は高句麗の恵慈に師事し、『法華経』に深く関与していった。当時、朝鮮三国から日本に渡来した人物は多かったが、逆に日本から百済に帰化し、百済の朝廷で活躍した人物もいた。例えば、日羅である。日羅は、聖徳太子と深く交流した人物でもある。高句麗に留学した僧侶としては、行善がいる。行善は、高句麗においても、日本においても尊敬された人物であった。

**奈良時代**

奈良時代には、南都六宗の教学伝統が確立され、南都六宗の成立とそれ以前の朝鮮三国の仏教は非常に深く密接な関係があったことが、多くの研究によって明らかになっている。百済出身である道蔵は、『成実論疏』を著述し、後代に多くの影響を及ぼした。8世紀の日本仏教の学問的水準は、中国や新羅と比較しても決して遅れていなかったと考えられる。日本華嚴宗開創の土台を作ったのが審祥である。彼は、740年、東大寺において日本で最初

に『華嚴經』の講義を行った。日本は、奈良時代に中国と新羅の仏教文献を積極的に、必死に研究し、独自の仏教思想を形成していったのである。

### 平安時代

平安時代は、記録を見る限りでは、飛鳥時代や奈良時代ほど韓日両国の仏教交流は活発ではなさそうに思われる。しかし、この時代は、韓日両国仏教の「人情」が互いに交差・交感した。例えば、新羅仏教を代表する元暁の子孫・薛仲業が日本に使節としてやって来た際、元暁の『金剛三昧経論』を読んでいた日本の一真人が、薛仲業に対して元暁を賛える詩を書いたという記録が残っている。これを契機に、新羅では9世紀始めに元暁の碑文である「誓幢和尚碑」が立てられたという。また渤海僧が日本僧の弟子になったり、新羅僧が日本僧の著述を学んだりもしたようだ。8世紀末、日本の華嚴学の水準は、その源流である唐や新羅の華嚴学と肩を並べる次元を越え、逆に影響を及ぼす水準に到達した。

### 室町時代・江戸時代

室町時代になると、大蔵経板を得ようとする日本側の努力が結実し、高麗時代の再彫大蔵経が日本に多量に流通した。以後、江戸時代には、両国の公式的な仏教文化交流は見られないというのが現実である。仏教と直接的な関連はないが、1607年に江戸幕府と朝鮮の国交が回復して以来、1811年まで200年余りの間、12回にわたって日本に到来した朝鮮通信使は、一種の文化使節団として鎖国時代における両国間の文化交流が持続したことを示している。

### 近代

近代日本仏教学界の最大の成果の一つは、『大正新脩大蔵経』と同じ校勘本大蔵経を集成したことである。そして、浄土真宗西本願寺の大谷光瑞が中心となった大谷探検隊が成し遂げた成果は、仏教に対する情熱によって成し遂げられたものであり、日本近代仏教の誇るべき象徴でもある。また、高橋亨の『李朝仏教』（1929年）や鎌田茂雄の『朝鮮仏教史』（1987年）など、韓国仏教に対する多くの研究がなされた。

---

---

### ❖ ま と め ❖

---

---

古代から中世までは韓国の仏教が日本に多くの影響を及ぼし、近代以降は、日本の仏教学界の成果に基づいて韓国仏教研究が活性化された。これは文化の受容と伝達、交流と流通、逆輸入と新しいビジョンの創出の典型的事例であろう。また、日本は新羅から高麗にいたる古代から中世の韓国仏教文献の目録および写本の最大所蔵先でもある。日本所在の経論の写本と韓国にある刊本との厳密な比較研究を通じて、相互共同研究がより一層進展

することが期待される。

---

---

❖ **第一部 時を越える—仏教の研鑽—** ❖

---

---

**題 目**：「日韓仏教交流と高麗版大蔵経—室町・江戸初期の大蔵経の活用を中心として—」

**講演者**：馬場久幸氏（佛教大学非常勤講師）

**時 間**：10：45～11：25

---

---

---

---

❖ **講演のポイント** ❖

---

---

室町時代(朝鮮時代前期)の日韓仏教交流は、高麗版大蔵経(以下高麗版)の交流であったと言えるほど、幾多の高麗版が朝鮮半島から日本にもたらされた。しかし、様々な活用事例が報告される江戸時代とは対照的に、室町時代において高麗版がいかに活用されていたかは定かではない。講演では、室町時代の日本伝来に焦点を当て、高麗版の江戸初期までの活用事例について発表がなされた。

---

---

❖ **講演の概要** ❖

---

---

**日本に伝来した高麗版**

室町時代、44歳もの高麗版が日本に伝来している。同時代の足利義持(1386～1428年)は大蔵経だけでなく、その版木までも朝鮮に要請するほど、高麗版に深い関心を抱いていた。続く足利義政(1436～1490年)も、8歳の大蔵経を朝鮮から受け取っている。その他、室町時代には、数多くの大蔵経が要請されていることが明らかとなっている。

**北野社一切経と高麗版**

北野社一切経は、北野経王堂の覚蔵坊増範が応永19(1412)年に発した願に基づき、同年3月から8月までの5ヶ月間で、200余人の協力を得て、勸進書写された一切経である。各経典に付された千字文函号から判断すると、基本的に宋の思溪版大蔵経が底本だが、一部高麗版を底本としているとも指摘される。たとえば、北野社一切経と高麗版それぞれの大般若波羅蜜多経の間には、数多くの類似点を確認される。同じく離垢施女経に関しても、北野社一切経と高麗版で類似点が見ることができる。

北野社一切経の底本となった大蔵経は、高麗版や思溪版大蔵経が混ざった混合蔵であるが、このような混合は日本でなく、朝鮮で行われた可能性が高い。実際、中国の大蔵経が朝鮮半島を経由して日本に伝来した事例として、①相国寺所蔵の大蔵経、②対馬西福寺所蔵・大般若波羅蜜多経、③対馬妙光寺所蔵・大般若波羅蜜多経、④園城寺所蔵大蔵経等が挙げられる。

### 将軍誕生日祈祷と高麗版

室町時代、南禅寺や天竜寺、東福寺といった禅宗寺院では、修正看経や善月祈祷をはじめとする様々な祈祷が、室町幕府の命令でとり行われていた。その一つが、足利将軍の誕生日を祝う将軍誕生日祈祷である。満斎准后日記によれば、この将軍誕生日祈祷の中、一切経、すなわち大蔵経の転経が実施された。そして、この足利将軍誕生日祈祷が行われた時期に、室町幕府は、朝鮮に対し盛んに大蔵経を要請するようになる。以上の点から、朝鮮への大蔵経の要請には、寺院の創建や再建という理由に加え、禅宗寺院で挙行されていた将軍誕生日祈祷での転読に使用するためという理由もあったと考えられる。

### 江戸時代初期の大蔵経刊行と高麗版

日本で初めて刊行された大蔵経は、天台宗の僧天海による天海版大蔵経だが、この天海版大蔵経の登場以前に、宗存という高日山法楽院常明寺の僧が、大蔵経の開版を発願し、京都の北野経王堂で刊行作業に着手している。その事業は、慶長 18(1613)年から寛永 3(1626)年まで 13 年に及んだが、全蔵が刊行されるまでには至らなかった。この宗存版大蔵経(以下宗存版)の底本は、高麗版と指摘される。

同じく宗存が刊行した一切経開板勸進状によると、最終的に伊勢神宮の内宮に奉納するため、大蔵経の開版を志したという。以前は、伊勢の内外両宮に大蔵経が安置され、読誦等も行われていたが、いつしかそれも失われ、長らく不在が嘆かれていた。その問題を解決するため、宗存は大蔵経の刊行に踏み切った。

### 宗存版と高麗版大蔵経

上記のように、宗存版は高麗版を底本としている。そこで、現存する宗存版の中から下記の四つの経典を選出し、底本である高麗版と比較を行った。

- ① 舍衛国王夢見十事経(国立国会図書館蔵)
- ② 仏説一切如来金剛寿命陀羅尼経(国立国会図書館蔵)
- ③ 大般若波羅蜜多経 卷第 16(本證寺蔵)
- ④ 阿弥陀鼓音声王陀羅尼経(龍谷大学図書館蔵)

結果、宗存版と高麗版で、経典の内容が変わるような大きな違いは見られなかったが、双方が使用する漢字に少ずつ異なりがあり、また仏説一切如来金剛寿命陀羅尼経に収録される陀羅尼の数も、一致しないことが明らかになった。宗存は、慶長 17(1612)年に、山城

---

国石清水八幡宮の一切経蔵から阿弥陀鼓音声王陀羅尼経と仏説一切如来金剛寿命陀羅尼経を含む21部の経典を借り受け、京都の二条御幸町で書写している。宗存版を刊行するにあたり、高麗版と、この慶長17年に書写した21部の経典の校合を行ったために、先の相違が生じたのではないかと推測される。

---

### ❖ ま と め ❖

---

室町期の日韓仏教交流の中心は、大蔵経の交流であったと言っても過言ではない。それほど、日本側は多岐にわたって大蔵経を要請しており、さらに、それが朝鮮時代の仏教政策とも咬み合った結果、44蔵(中国の大蔵経も含む)もの大蔵経が日本にもたらされた。その室町ないし江戸初期の活用事例をみると、北野社一切経や宗存版の底本に用いられていたこと、将軍誕生日祈祷で転読されていたことが確認できる。

高麗版に関する研究成果といえば、1950年以前は日本側から提出されたものがほとんどであったが、それ以降は、韓国側のものが増えている。具体的には、1900年初頭から現在に至るまで、日本側から発表・刊行された論文と書籍は141点、韓国からは314点の研究論文ないし単行本が発表・刊行されている。その背景として、版木が納められた海印寺の大蔵経板殿が、1995年にユネスコ世界文化遺産に、2007年に世界記憶遺産に登録され、韓国で、文化財に対する意識が高まったことが挙げられる。結果、その研究にも一層の拍車がかかったと思われる。

対して日本では、1950年以降、中国の諸大蔵経や高麗版の閲覧が容易でなくなり、また、戦後もたらされた敦煌文献に注目が集まったことで、大蔵経全体の研究が減退した。今後は、こういった状況の変化を踏まえた、仏教研究の日韓相互の発展が期待される。

---

**題 目**：「大衆仏教の巨星・元暁と親鸞—その生涯と精神・思想の共通性—」

**講演者**：藤能成氏（龍谷大学文学部教授）

**時 間**：11：30～12：10

---

---

### ❖ 講演のポイント ❖

---

元暁(617～686年)と親鸞(1173～1262年)は、共に大衆仏教の巨星と呼ぶに相応しく、人々の救済のために、念仏を広めた人物であった。両者の生涯・精神性を比較すると、様々な共通点が見られる。講演では、両者の生涯・精神・思想にどのような共通点があるのかを指摘し、さらにそれらの共通点がいかにして生まれたのか、その背景を探り、それらのことが内包する意味について検討された。



---

---

❖ 講演の概要 ❖

---

---

### 元暁と親鸞、その共通点

元暁は、日本における聖徳太子のような人物で、韓国の歴史上、最も偉大な思想家とされている。代表的な著作は『金剛三昧経論』と『起信論疏』である。元暁の思想は、韓国ばかりでなく、中国の華嚴宗にも大きな影響を与えた。また日本にも伝えられ、多くの書物に引用された。ただ彼には弟子がなく、また彼の教えを継承する教団が形成されることもなかった。親鸞が『顕浄土真実教行証文類』に多くを依用した、憬興の『無量寿経連義述文贊』には、元暁の『無量寿経宗要』に関する論評が見られる。また親鸞と同時代の僧である高山寺の明恵(1173～1232年)は、『宋高僧伝』に基づいて『華嚴縁起』を製作し、そこには元暁と義湘が華嚴宗の祖師として描かれたこととは、広く知られている。

一方、親鸞は、現代日本における伝統仏教最大の宗派である浄土真宗の宗祖と仰がれ、その教えは長い歴史を通じて、多くの日本人の精神を涵養してきた。

両者の生涯には、多くの共通点が見られる。まず両者が生きた時代は、戦乱の世であった。両者は共に僧侶でありながら結婚し、子を設けた。また苦難を機に、自らの罪業性への自覚を深め、改名した。その後、両者ともに『無量寿経』を基に、大衆に向けて念仏の教えを広めた。また共に『華嚴経』の「無碍」の語に共鳴した(元暁は『華嚴経』にちなんで「無碍」と名付けた瓢箪をもち、親鸞は「念仏者は無碍の一道なり」と述べた)。さらに両者ともに多くの著作を残した。

### 両者の仏道思想と往生因

元暁の展開した浄土往生の仏道は、人々を「無此無彼、穢土浄国本来一心、生死涅槃無二際」を内容とする「帰原の大覚」(一心源)へ導くことを願うものであった。元暁は、『起信論』に表された一心二門の世界観、つまり目に見える物質の次元は、目に見えない精神の次元と一体であり、そこにおいてはすべてが一つにつながっていることこそ真実であり諸法の実相であると確信をもっていた。

元暁は、往生因について、阿弥陀仏の本願力を承けて、正報莊嚴(仏身の相)と依報浄土(浄土の相)を感じることであり、自らの業因の力によるものではない、と阿弥陀仏の本願力への全幅の信頼を表明している。また行者は、(悪賊に追われ、まさに殺されようとする時に、目の前にある河を渡る方法を思念するが如く)余念を雑えず、仏名・仏相等を無間(間を置くことなく)念仏すべきであるとした。

一方、親鸞の示した仏道の特徴は、仏道を歩む衆生を、罪悪深重・煩惱成就の凡夫と規定し、仏道の全てを阿弥陀如来の回向によって成立させたことである。親鸞における往生因の

特徴は、このように往生の因も果も、すべて法蔵菩薩の誓願が成就されることにより、衆生に回向される全面的に阿弥陀仏の本願力によって成立するという点にある。親鸞はこれらを「他力」と呼んだ。

元暁も親鸞も、大衆の救済を念頭において、凡夫が往生できる、信を中心とした仏道思想を展開した。また往生因について元暁は、「阿弥陀仏の本願力によるもので、自業因力ではない」とし、親鸞は、「法蔵菩薩の第十八願成就の本願他力によるもの」とし、共に阿弥陀仏の本願力による救済の絶対性を強調したのである。

### 仏智疑惑の克服

元暁は、仏智への疑いを越える方法を示している。まず不思議智に対しては、衆生の浅識による思惟が及ばないので「仰信」せよと説く。そして、不可称智に対する疑いに対しては、諸法の実相は甚深難見であり、衆生が尋思称量することのできないものであることを認識せよと説く。また、大乘広智に対しては、この智の無始無終なる運載の働きを知り、疑いを超え、信じよと説く。無等無倫最上勝智に対しては、元暁は「只仰信すべし」と言う。「仰信」とは、いわば、疑惑を抱くことなく、如来・仏智に全幅の信頼を置いて、一向にひれ伏して信じることである。

親鸞は、真門の自力称名行を選び取ることにより、第二十願(果遂の願)の働きにより弘願門(第十八願・他力の仏道)へ導かれるとする。自力称名を続ける時、阿弥陀如来の名号の功德によって本願力への疑いが晴れ、弘願門すなわち眞実信心・他力の仏道へと転入できる道が開かれるからである。親鸞は、仏智への疑惑を越える方法として、以下の五項目の実践を勧めている。

- ① 阿弥陀如来のちかひを聞き、② はからひを離れ、③ ちかひの不思議を信じ、④ 名号を称え、⑤ ちかひの働きにまかせる。

親鸞は、誓願を不思議、名号を不思議であるそのまま信じ称名し、自身の「はからい」を捨てるべきであり、不思議であることを自身の分別心で聞き分け知り分けることは「ひがごと」であり、「はからい」であり、往生の業にははからいがあってはならないと語る。

不可思議とは心が及ばないという意味であり、凡夫ばかりか(一生補処の)弥勒菩薩でさえも心が及ばないのであって、仏だけがお分かりになることであり、それを不可思議と言うのだと親鸞は語る。「仏智が不思議であることをそのまま信ずる心」が肝要である。

---

### ❖ ま と め ❖

---

元暁と親鸞には、生涯の歩み、精神性、仏智に対する言葉の表現において多くの共通性がある。両者の生涯の歩みに共通性があることは、不思議としか言いようがないが、これは、民衆救済の願いを以て『無量寿経』の教えに出遇った者による、等しく導かれた歩みだと見

---

することもできる。また両者が「仏智の不思議」に関する受け止め方を、同様の言葉で表現しているのは、「仏智に出会うという体験」が、時代と地域を超えた普遍的な共通体験であることの証左ではないだろうか。人間には仏智の働きかけを受け止める感性が平等に備わっており、仏智に出会うという普遍的な体験をした者は、同じことを感じ、それを同じように表現するのかもしれない。

---

## ❖ 第二部 境を越える—仏教の伝播— ❖

---

---

題 目：「渡来系氏族と寺院」

講演者：赤羽奈津子氏（龍谷大学仏教文化研究所客員研究員）

時 間：13：15～13：55

---

---

### ❖ 講演のポイント ❖

---

古来、朝鮮半島と日本列島は密接な関係を有していた。とりわけ、朝鮮三国の抗争が激化し、新羅が三国を統一するに至る5～7世紀、あるいは戦乱を逃れ、あるいは母国の滅亡を契機として、多くの人々が日本列島へと移住した。こうしたいわゆる「渡来人」（この語には様々な議論がある）あるいは渡来系氏族が有した先進的な技術・文化の一つとして、仏教がある。ここで言う仏教とは、教義のみならず、寺院建築などの技術も含んでいる。

---

### ❖ 講演の概要 ❖

---

#### 「境を越える」

境と聞くと、「線」をイメージしがちだが、古代において境は「面」であった。端的にそれは「海」であった。近年では、この「面」で活躍した越境人・境界人（商人・僧侶）にも注目が集まりつつある。朝鮮半島から日本に渡来してきた人々の波について、歴史学者の上田正昭は、四つに分類している。

- ① 紀元前2世紀：稲作の開始・渡来系氏族の伝承
- ② 5世紀前後：高句麗の南進時期
- ③ 5世紀後半～6世紀：朝鮮三国の抗争激化
- ④ 7世紀後半：百濟・高句麗の滅亡、新羅の三国統一



8世紀の日本の人口は約800万人だと言われているが、その内200～300万人は渡来系氏族だったとも考えられている。朝廷は、渡来系氏族に対して「百済王」「高句麗王」の姓を授与するなどして統治した。

朝鮮・大陸方面からやって来た渡来系氏族により、仏像や経典などが日本に運ばれた。そして彼らが定住した場所で、盛んに仏教信仰が行われたと推察される。また、いわゆる仏教教義だけではなく、それに伴う技術(建築・芸術など)も、日本にもたらされた。

#### 飛鳥寺と渡来系氏族

飛鳥寺(法興寺)建立の背景には「物部守屋討伐の戦勝祈願」あるいは「受戒制度を整えるための法師寺」としての理由が挙げられる。また、建立に際して、高句麗や百済の助力があったと考えられている。史料からも、百済から派遣された技術者たちは、飛鳥寺建立に際して尽力したことが見て取れる。飛鳥寺仏塔の建築に関しては、近年発見された百済王興寺との類似性が指摘されている。飛鳥寺の刹柱を建立した日に、蘇我馬子(嶋大臣)ら百余人は百済の服を着用して参列したという。飛鳥寺は確かに蘇我馬子の発願によって建立された寺ではあるが、その規模や建立に至る経緯を見ると、単なる蘇我氏の氏寺ではなく、国家プロジェクトの一環として建立された「官寺」であったとも考えられる。飛鳥寺西方遺跡からは、石敷き・建築址、また何か(食物か)が燃やされた跡も発見されている。

#### 高麗寺と渡来系氏族

高麗寺はこの地域に本拠地を置く渡来系氏族である狛氏によって建立されたと思われるが、一方で天智天皇の勅願寺だとも考えられている。初めて日本へやって来た高句麗使は、日本海を渡って越国(北陸地方)に到着した。欽明天皇は高句麗使の到来を喜び、山背国相楽郡の館で丁重に接待した。この地域は高句麗使のために作られた「相楽館」の所在地である。高麗寺は川原寺・崇福寺同様に天智天皇の勅願寺であった可能性が指摘できる。高麗寺に先だって、この地に相楽館があったことは確かであり、新しく寺院を建築するに際して、役目を終えた外交施設を利用したと考えることもできる。

なお、現在の相楽郡一帯は、飛鳥と大津京を結ぶ交通の要衝であった。先述の越国に到着した高句麗使も、北陸から琵琶湖を通り、相楽館に入ったとされる。相楽は、古代の高麗人をはじめとする渡来人その他のネットワークの発信地だったのである。

#### 檜隈寺・坂田寺と渡来系氏族

檜隈寺は、現在の奈良県高市郡明日香村の南部に位置する檜前に存在した寺院である。この寺に関する文献は少なく、7世紀後半にはすでに建立されていたことがわかっている程度である。檜隈寺は、東漢氏に由来する氏族の氏寺として機能していたと思われる。建立時期は、蘇我宗家滅亡後、壬申の乱前後に相当する。蘇我氏と深い関係を有し危機的状況にあった東漢氏が、一族の結束を強めるために建立したと推測される。現在はすでに遺址

しか残されておらず、伽藍配置もはっきりしないが、発掘調査によって渡来系技術を反映した瓦が使用されていたことが判明した。

坂田寺に安置された仏像は用明天皇の病氣治癒のために、坂田寺自体は推古天皇のために建立されている。戦乱を避けて故郷の地を離れた亡命者たちは、時には仏教を通して新しく居住することになった地への帰属を表明することがあった。鞍作氏は坂田寺建立をはじめとする仏教事業によって、国家に対する帰属を示した。それは、日本列島に居住する渡来系氏族が、あくまで倭の朝廷に帰属し、その政権を支える存在であったことを示唆している。この点に関しては、更に他の渡来系氏族の事例や中国・朝鮮半島の事例と比較検討する必要がある。

---

---

### ❖ ま と め ❖

---

---

朝鮮三国の抗争、百済・高句麗の滅亡によって、多くの人々が日本列島へ渡来してきた。「面」であった境は、極めて曖昧だったのである。「境を越える」とは、上を越える(国家レベル)だけではなく、下を越える、つまり民衆レベルで交流するというイメージをもつことも可能である。飛鳥の仏教文化は渡来系氏族との交流の中で生まれてきた。曖昧な「境」を越えて、混ざり合っていた飛鳥仏教のあり方は、ある種「交流」の理想像なのかもしれない。

---

**題 目：**「朝鮮開化期、日本仏教の布教活動—真宗大谷派と曹洞宗の布教—」

**講演者：**姜文善（慧諫 Hye-Won）氏（東国大学校佛教大学教授）

**時 間：**14：00～15：00

---

---

---

### ❖ 講演のポイント ❖

---

---

朝鮮開港期と大韓帝国期を通じて活動を行った真宗大谷派の奥村円心と五百子の兄妹、そして大韓帝国末期に仏教界に少なからぬ影響を与えた曹洞宗・武田範之の活動が紹介された。朝鮮開花期の日本仏教の布教の様相と特徴を把握する際、布教使たちの活動を考えることは、大変重要な意味をもってくる。

---

---

### ❖ 講演の概要 ❖

---

---

#### 奥村円心の活動

近代日本仏教の朝鮮布教は朝鮮の開港直後に始まった。明治政府が大谷派の奥村円心

(1843～1913年)に朝鮮布教を依頼した理由には、彼の祖先である奥村浄心(1534～1582年)が釜山に高德寺を建立し布教活動に従事したことが挙げられる。また、大谷派は幕府政権が打倒された後、維新政府側と緊密に結託して政府の政策においてどの仏教宗派よりも積極的に支援する立場を取ったことも理由として挙げられる。さらに、大谷派は、新政府の北海道開拓事業にも参加し、それを踏み台として、中国・朝鮮における布教にも真っ先に着手していた。

奥村円心は、1877(高宗14、明治10)年9月、釜山に到着して布教活動を始め、翌年12月に釜山別院を開設した。また円心は、釜山別院内に韓語学舎を開設して、本山からの留学生に朝鮮語を習わせ、仏教学も教えた。朝鮮の開化僧・李東仁(イ・ドンイン、?～1881年)は、円心と多くの対話を行った。円心は、李東仁の日本密航を助け、真宗の僧侶になる得度式を受け、福沢諭吉をはじめとする日本の有力者たちと交流した。また日本の政策と制度を研究し、書籍と資料を購入し、金玉均、朴永孝など開化派要人に送ったという。李東仁はその後、中央政治に進出し、開花運動を行った。このように、朝鮮における開花運動の背景には、少なからず円心の影響があったのである。円心は、1884年12月、彼が後援してきた開化党が起こした甲申政変が失敗した後、京都の本山に戻った。

#### 奥村五百子の活動

日本に戻った奥村円心は、清日戦争(1894～1895年)後に、韓国での布教活動を再開した。円心の光州における布教活動には、彼の妹・奥村五百子(1845～1908年)が参加することにより一層活気を帯びた。奥村兄妹は、殖産興業指導の奨励と実業学校の経営に力点を置くことで合意した。五百子は光州に到着後、実業学校の運営を開始した。しかし、順調に進められた学校事業は、ほどなくして地域住民の激しい抵抗にあい、結局、失敗に終わった。光州で兄・円心と共に布教活動をした五百子は、日本に戻った後、清国で義和団運動が発生したのを契機に1901(明治34)年、愛国婦人会を結成し、そこで救護活動を展開した。愛国婦人会は戦争中に夫や息子を亡くした遺族を慰労し、戦線の将兵を慰問するという名目で組織された救護団体であった。最盛期には、この団体に加入した女性たちだけで300万人を越えたという。五百子は19世紀末から20世紀初めの日本の最も活動的な女性に数えられ、日帝期には、彼女に関する伝記が、数回にわたり刊行されるほどであった。彼女が活動した光州(光州公園内：全羅南道光州広域市南区中央路)に銅像が建てられたのは、おそらくこの時期だと推測される。

#### 武田範之の活動

1905年、乙巳条約締結以後、韓国仏教界に最も大きな波紋を及ぼした日本の宗派は、間違いなく曹洞宗であった。そしてその中心に布教使・武田範之(1863～1911年)がいた。武田は1895年浪人らと共に、朝鮮において明成皇后の殺害事件に加担した。この事件で武田は日本に戻され刑務所に投獄された。だが、まもなく釈放され顯聖寺に留まることになっ

た。以後、彼は僧侶として生活していた。

武田は、1901年に第31代・顕聖寺住職になり、1904年には曹洞宗・韓国布教使に任命された。武田が、一進会の会長で侍天教の教主である李容九(イ・ヨング、1868～1912年)に書いた文「仏教再興書」は、韓国仏教界に大きな影響を及ぼした。彼はその文で、まず僧侶の都城出入禁止が解除されることによって、仏教再興の契機が整えられたとした。そして仏教再興のための前提条件として、当時賤視されていた僧侶の地位を高める必要があるとし、京城に会務所を設置して仏教再興への方策を考究し、有能な僧侶を地方に派遣して、仏法を講説させた。さらに仏教学校を設立することも主張した。武田は、1908年に曹洞宗の韓国布教管理となり、ソウル・筆洞に曹溪寺を建立し、1909年には龍山に瑞龍寺を建立して曹洞宗の布教拠点とするなど、曹洞宗の布教事業も怠ることがなかった。だが1909年以後、彼が韓国で心血を注いだ主な仕事は、韓日合併運動だった。彼は、韓国と日本の高位官吏に対して合併の妥当性を喧伝することに邁進したのである。

---

---

❖ ま と め ❖

---

---

真宗大谷派の奥村兄妹と曹洞宗の武田範之の布教活動に現れた性格と特徴は、主に以下の三つである。

- ① 開化期日本仏教各宗派の布教使は、当代朝鮮政界の実勢と緊密な関係を維持して布教の基盤を固め、教勢を拡張させていった点。
- ② 奥村円心と五百子兄妹の布教活動によく表れているように、布教活動初期の方式が短期的で断片的な事案に焦点を合わせたとすれば、以後の大韓帝国期には、より長期的で実用的な側面へと転換された点(時が経つほどに、多くの仏教宗派が学校教育の重要性を強調したこと)。
- ③ 曹洞宗・武田の活動に見られるように、大韓帝国期には布教開始初期から権力の核心部に速かに接近する戦略を駆使して、短期間にその効果を得ようとした点。

朝鮮開化期における30余年間の真宗・曹洞宗による日本仏教の布教活動は、日本政府との利害関係が合致した状態から出発したものであり、その活動は政府の政治的影響下から抜け出せなかったと言えるかもしれない。

---

---

❖ 第三部 未来へ向けて—仏教の役割— ❖

---

---

題 目：「韓国における児童生徒人権条例の内実化—京畿道における教育研修を中心に—」

講演者：出羽孝行氏（龍谷大学文学部准教授）

時 間：15：05～15：45

---

---

---

❖ 講演のポイント ❖

---

---

2010年に「京畿道児童生徒人権条例」が制定された。これを契機に、児童生徒の人権を尊重しながら民主的な学校を創造していくための現場教師達の取り組みが行われている。2014年夏に京畿道教育庁が主催するNTTP研修として実施された「京畿道平和人権研修」は、大変注目される活動であった。講演では、研修の運営主体である京畿道人権教育研究会所属教員、そして同研修に参加した教員の教育現場での取り組みや認識から、現場教員の中から学校文化を人権親和的なものに変えていくことができる可能性について説明が行われた。

---

---

❖ 講演の概要 ❖

---

---

### 韓国における児童生徒人権運動

日本の学校では体罰やいじめなどが問題になって久しいが、韓国でもこうした問題が深刻化している。韓国で生徒の人権問題が本格的に呈されるようになったのは1990年代以後である。1997年6月には教育改革委員会第4次教育改革案で体罰の禁止が提唱された。

### 京畿道児童生徒人権条例の特徴

京畿道は、首都ソウルとともに首都圏を形成し、ソウルのベットタウンだけでなく、地方の農村部をも包括する、韓国全体の人口の約4分の1を占める国内最大の自治体である。京畿道で2010年、全国初の児童生徒人権条例となる「京畿道児童生徒人権条例」が制定された。日本の条例と比較した場合、京畿道児童生徒人権条例の特徴は、教育監(公選)主導によって「児童・生徒人権」の保障をはかる学校改革条例である点である。つまり、条例に書かれた内容が実際に守られるように、違反があった場合に具体的には是正するための制度が準備されているのである。この条例は全5章から構成されており、特に第2章にあたる「児童生徒の人権」の内容が注目される。そこでは差別を受けない権利をはじめ、個性を実現する権利として学校が児童生徒の頭髪の長さを規制してはならないことなどが規定されている。また、体罰の禁止が明示されている。

日韓の児童生徒人権条例の違いとしては、例えば日本の子どもの権利条約(川崎市子どもの権利条約が代表例)が、子どもの権利の総合的な保障と「子どもにやさしいまちづくり」をめざす地域再生・地域改革条例であるのに対し、京畿道学生人権条例は、教育監主導によって『児童・生徒人権』保障をはかる学校改革条例となっている点などである。



## NTTP 研修

京畿道教育庁が、教員の専門性向上のために2012年度より導入している「新しい教師研修プログラム(NTTP: New Teachers' Training Program)」では、講師は人権活動家や国家人権委員会での勤務経験者をはじめ、児童生徒擁護官や青少年労働を研究する高校の教員などが含まれている。教員が教員を研修するという原則を守りつつも多様な講師を揃えている。

京畿道人権教育研究会が研修最終日に実施したアンケートによれば、すべての回答者が研修に対し、「非常に満足」、または「満足」と回答していた。重要なのは、元来人権に関心のある教員だけが受講して満足したというわけではないことである。これは条例に批判的である保守系団体である韓国教員団体総連合会(教総)の教員も満足していると回答していることから明らかである。より積極的に児童生徒の人権尊重の意味を理解する管理職教員を増やす上でも、研修は意味があったと考えられる。

しかし、一部の教員たちからは、このように児童生徒の人権を厳格に保障することにより、「問題生徒」の声が大きくなり、生徒指導が成立しなくなるのではないかと批判も出ている。

## 近年の生徒の変化

近年、生徒の状況が変化し、教師はそれについていけないため、教師の疲労度は大きい。つまり、教師は生徒から傷つけられても耐えているのである。指導が難しい生徒は家庭的にも問題が多いことが多く、これは近年の韓国の社会状況の変化にも関係していると考えられる。このような状況下で人権条例が施行され、教師にとっては、条例のために生徒指導が難しくなっているという考えに至ることがある。道徳教育や「人性教育」も人権教育につながっているが、それを現在の学校の教育の中で行うのは、そうたやすいことではない。

## 学校組織の問題

また、教師たちにとっては出世が子どもへの教育よりも大きな関心事になっており、その結果、様々な問題が起きている。当然、学校には様々な教師たちがおり、そのような教師たちの考え方を集めて一定の方針を決め、方向性を示していくのが管理職の役割である。しかし、実際には管理職になるための「点数」をためた人が管理職になっている。また、校長が変わると新しい校長の方針によって組織そのものが変わってしまうことになる。これは、公立学校の最大の問題点でもある。条例によって体罰は禁止になり、実際に体罰はなくなったが、学校現場を見るとまだまだ人権侵害に関わる事柄がたくさん残っている。上から禁止されたことを守るだけであり、なぜ一つ一つのことが人権侵害かについては考えてはいない現状である。教師も生徒も、まだまだ人権感受性が低いと思われる。

~~~~~

❖ ま と め ❖

- ① 京畿道がはじめたNTTP研修は受講者である教師にとって人気のある研修であり、総じて受講生の満足度は高かった。
- ② 条例により体罰はなくなり、効果が認められるが、教師が条例の趣旨を理解した結果であるというよりも、上からの指示に従っただけであると考えられる。
- ③ 教師による生徒の人権に対する認識差は大きく、同僚同士の意思疎通が不足している。
- ④ 一般に教員の人権に対する意識は高くなく、子どもの人権感受性を高め、条例の精神を広く学校に普及させるためには教員に対する人権教育研修が重要になる。

題 目：「韓日平和のための仏教の役割—『懺悔なき許し』の再解釈を中心として—」

講演者：金浩星（Kim Ho Sung）氏（東国大学校佛教大学教授）

時 間：15：50～16：30

❖ 講演のポイント ❖

2015年は、韓国が日本の植民地支配の解放から70年になる年である。韓国では、年の初めから「光復70年」に関連するさまざまな記念行事が行われている。また2015年は「日韓国交正常化50周年」であるが、両国とも「相手と共に」というよりは、自国の中で各自の意味賦与にだけ熱中しているようにしかみえない。このような状況の中、仏教は、日韓の共存と平和のためにどのように寄与できるのか。これまで執筆してきた自身の9編に及ぶ日本の「戦争」に関する論文から、特に今回は、エッセイ「懺悔なき許し」を取り上げ、再解釈が行われた。

❖ 講演の概要 ❖

「謝罪」について

「日本が自分たちの歴史的過ちについて認めて赦しを求めてこそ、我々も許すことができるのではないか」という発言がなされることがある。金氏も「懺悔なき許し」を執筆した当初は、これが民主主義であると考えていた。最近の「謝罪」の問題は、具体的には慰安婦問題と関連するものとなっている。そしてこれは、日韓関係を国交正常化以降、最悪の状況にまで追い込んだ。



「日本 vs. 日本」の構図

「日本 vs. 韓国、日本 vs. 中国」の構図では、前者の日本が加害者であり、後者の韓国や中国が被害者である。これはあまりにもはっきりしていて誰でも簡単に分かることである。しかし、「日本 vs. 日本」の構図では、加害者も日本であり、被害者も日本になる。つまり、日本の植民地時代に被害に遭ったのは韓国人や中国人だけではないということである。日本人の中でも多くの被害者がいたということである。こう考えると、「被害者日本」もやはり謝罪を受けなければならないのではないだろうか。「加害者日本」とは、具体的には、あの当時、戦争遂行に直接的な責任があった人々や戦争のイデオロギーを供給した学者たちのことである。

「国のせいで」死んだ人たち(=被害者日本)を追慕することと「国のために」死んだ人たちを追慕することとは、天と地の差がある。前者の立場をとる人たちが語る平和と、後者の立場をとる人たちが語る平和は、質的に全く異なったものなのである。

謝罪の終焉、その可能性と条件

「被害者日本」に対する「謝罪」という視点が消えてしまったために、その空席を埋めたのが、「日本はいつまで謝ってばかりいなければならないのか」という、いわゆる「謝罪疲労感」の問題であった。「謝罪」の終焉は、このように、自ら戦前の戦争犯罪から自由になること、すなわち、戦争責任から逃れる立脚地を用意することによって可能になる。真に重要なことは、いつ、どのように「謝罪」の意を込めた談話を行ったかどうかである。そして、それよりもっと大事なことは、「加害者日本」が戦争期に持っていた制度や思考から本当に抜け出すことである。またそれは、「加害者日本」が「被害者であると同時に加害者である日本」に対してや、ただ被害だけを被った「被害者日本」に対して「謝罪」することから出発しなければならない。「被害者韓国」や「被害者中国」に対する「謝罪」の問題は、このような過程を通じて初めて解決できるであろう。「武器の戦争」は、原爆によって終結されたが、「思想の戦争」は決して終わらなかった。これを、我々は仏教思想をもって終わらせることはできるだろうか。

「許し」の構図

「韓国 vs. 日本」のような、対立構造の中にいる限り、我々は、真に日韓平和を構築することはできないのではないだろうか。

「懺悔をするまで決して許すことはできない」とすることは、暴力をはらんでいる——。しかしそうだとすると、「慰安婦のおばあさんたちが『謝罪しろ、謝罪しなければ赦すことはできない』というのが、暴力だということか」という反論が出てくるかもしれない。しかし、大事な事柄は、「日本 vs. 韓国」でも「韓国 vs. 日本」でもなく、「韓国 vs. (日本)」の構

図である。「謝罪」の主体である「加害者日本」を「赦し」の主体である「被害者韓国」が、括弧をつけてあげられなければならないのである。「括弧をつける」というのは、端的に、「加害者日本」の謝罪の有無とは関係なく「許す」ことができなければならないということである。この「許し」とは、「無条件な許し」として、すでに謝罪を受ける前に、先に「許し」を行うということで、これはいわば「絶対的な許し」である。もしこれが「理想」であっても重要であることに間違いはないのである。

「許し」の可能性

相手が私を殺そうとしても、私が相手を殺さないのが非暴力(ahimsā)である。相手が私に怨みを植え付けたのにもかかわらず、私がその怨みをはらさないのが非暴力である。それは、誰にでもできることではない。凡夫衆生には不可能かも知れない。しかし、ブッダの教えに薫習されてきた仏教徒であれば、このような非暴力に挑戦できるのではないだろうか。未来のために(あるいは、未来へ向かって)「許し」を行うとしても、それとともに共存と共栄を模索していくとしても、過去に対しては真摯に省察を重ねなければならないだろう。

❖ ま と め ❖

日本の仏教徒たちは「自己否定、我からの脱皮(脱我または無我)」を省察し、韓国の仏教徒たちは「対立の超越、非暴力」を深慮せねばならない。「国家」という大きな「家」から出家しなければならない。民族主義や「国家」を越えて平和を成し遂げることこそ、ブッダの出家精神が持つ国際政治学的含意であり、仏教徒が背負うべき実践的使命の一つであろう。

コメンテーター：龍溪章雄（龍谷大学文学部教授）

藤原正信（龍谷大学文学部教授）

時 間：16：40～17：20

❖ コメンテーターによるまとめ ❖

金浩星氏の講演終了後、龍谷大学文学部教授の龍溪章雄、藤原正信両氏がコメンテーターとして登壇し、馬場久幸氏から金浩星氏までの計六講演のまとめを行った。龍溪氏が、馬場久幸、藤能成、金浩星三氏の講演のまとめを、藤原氏が、赤羽奈津子、姜文善、出羽孝行三氏の講演のまとめを担当した。



❖ 龍溪氏による講演のまとめ ❖

まず馬場氏の講演に関して、龍溪氏は、室町時代の高麗版大蔵経伝来の実態および同経の江戸初期までの活用を書誌学的・文献学的方法で緻密に考察した研究と総括し、本研究を通じて、近世日本における高麗版大蔵経の多種多様な活用事例が明らかにされたことを高く評価した。高麗版大蔵経は、北野社一切経や宗存版大蔵経の底本とされる一方で、將軍誕生日祈祷の際には転読に用いられた。さらにこれらのまとめを踏まえて、高麗版大蔵経を活用した將軍誕生日祈祷が全国的に実施されていたのか、あるいは畿内に限定されるものだったのか、講演者である馬場氏に対し質問を投げかけた。

つづく藤氏の講演に関しては、7世紀の韓国に生きた仏教思想家元暁と、後に浄土真宗の宗祖とあおがれることになる親鸞の生涯、精神、思想各面の共通点を比較思想的に解明した研究と総括した。具体的には本研究により、元暁と親鸞の以下の共通点が明らかにされたという。元暁・親鸞ともに、『無量寿経』にもとづき浄土思想を展開した大乘仏教の思想家、民衆を対象とする熱心な浄土信仰の伝道者であり、在俗であり続けることをライフスタイルとして選択した。思想面でも、仏智ないし本願力のはたらきに全幅の信頼をいだし、「仰信」の仏道とも性格づけられる、信心を中心とする念仏の道を共通して説いた。以上のように総括した後に、さらに次の三つの質問を講演者である藤氏に投げかけた。

- ① 親鸞の「隠頭積」をめぐって、「この視点は、元暁が「十念」について「頭了と隠密の二義」を認めたこととの近似性を伺わせる」と主張するが、「近似性」の理由・根拠について補足が必要ではないか。
- ② 元暁と親鸞の間に思想的な共通点が認められるなら、後者は何故、著作の中で前者を直接引用しなかったのだろうか。
- ③ 元暁と親鸞の仏道思想の共通点として「仰信」を挙げるが、親鸞の信心、仏智の不思議に対する態度と理解には、パトスの側面とロゴスの側面の両方がある。その点、元暁の理解はどうか。

最後に金氏の講演については、2003年に同氏が発表したエッセイ「懺悔なき許し」の再解釈を通じた、韓日両国の許しの問題に関する独自の考察と総括し、さらに本講演のなかで、戦争責任と戦後責任をめぐって、日本の仏教徒および仏教研究者に対して極めて具体的な問題提起がなされている点を高く評価する。質問については、加藤周一氏の主張をまとめる際に、金氏が「もし戦争を生み出したとき存在した社会的、文化的条件を存続させたことに寄与した人であれば、それが仮に戦後に生まれたとしても、その者には戦前の戦争に対して責任があるということだ」と主張する点に触れ、補足説明を求めた。

❖ 藤原氏による講演のまとめ ❖

最初に赤羽氏の講演については、同氏が「渡来系氏族が有した先進的な技術・文化の一つとして、仏教がある。ここでいう「仏教」とは、教義のみならず、寺院建築などの技術をも含んでいる」と主張する点に触れ、仏教を介した日韓交流の歴史を飛鳥寺などの事例を通じて跡づけた研究と総括した。その上で、次の二つの質問を講演者である赤羽氏に投げかけた。

- ① 渡来系氏族がみずからのより所とした仏教が、結果として蘇我氏の欲望充足の祈りを支えたといえるが、そのような蘇我氏の仏教と聖徳太子の仏教の質的な差については、どのように考えているか。
- ② 飛鳥寺と韓国の修徳寺の関係に、飛鳥時代から続く日韓交流の痕跡を垣間見ることが出来ると主張するが、朝鮮には廃仏政策の時代があり、修徳寺の歴史ないし事実関係には疑問が残る。その点をどのように考えているか。

つづいて姜氏の講演に関しては、日本仏教の布教活動を精神的侵略とみなす一方で、「朝鮮仏教が日本の近代仏教に接しながら」「抑圧と桎梏の泥沼を脱離して、主体的に近代仏教へと発展することのできる転機を掴むことができた」と述べる点に触れ、次の三つの質問を姜氏に投げかけた。

- ① 明治初年から続いた廃仏状況を経て、現人神としての天皇権威を受け入れることで、日本仏教は布教の自由を手に入れた。そのような日本仏教によって成立した近代と、朝鮮仏教の主体的な営みによって成立した近代仏教とは、どのような関係にあったのだろうか。
- ② 姜氏のいう「泥沼」のなかで、仏教の普遍性はどのように保持されたのだろうか。韓国固有の信仰との関係、あるいは徳治主義などの王道思想の根拠となった儒教との妥協は、あったのだろうか。
- ③ 奥村円心は、廃仏毀釈による失地の回復のために教団の要請に応じたのだろうが、実質的には、明治政府の朝鮮進出に対応したとも考えられる。その奥村円心による光州における三カ条の指針とは、はたして布教と呼べるものなのだろうか。

最後に出羽氏の講演に関しては、「京畿道児童生徒人権条例」を積極的に評価した人権教育研究会所属の教員たちの取り組みである「京畿道平和人権研修」が、韓国において児童生徒の人権に関心を持つきっかけとなっており、条例に反対する教員も研修には満足していること、さらに、教育行政の方針に左右されることの無い、より長期的な生徒人権の内実化を進めるためには、教員による持続的な学校文化の改革活動が不可欠と主張する点に触れ、以下の三つの疑問を提起する。

- ① 第一に、児童生徒は未熟という認識がまだ教員の中にあり、それ故、前者の基本的な人権も制限されてきたというが、そのような認識は、教員のみならず保護者の中に



もあるのではないか。児童生徒の人権に関する保護者の認識はどのようなものか。

② そもそも韓国における人権意識は何に拠っているのか。

③ 韓国では、条件付きながら 1982 年より、公教育における宗教教育は選択制となっている。日本でも、公教育における宗教教育の必要性がしばしば論じられるが、この人権教育と宗教教育の問題に関して、どのように考えているか。

挨拶：入澤崇氏（龍谷大学文学部長）

時間：17：20～17：25

377 年間、龍谷大学は「灯」を「伝」えてきた。灯の皿の「油」が「絶」えると、火は消えてしまう。つまり「油断」してはならないのである。我々日韓の文化交流も「油断」してはならない。日本の仏教者は、もしかするとこれまで「油断」していたかもしれない。一般の人々にとって日韓の文化交流を見通しの良いものにしていくことは、我々の役割である。そのためにもまずは、お互いを知り合うことから始めていくことが肝要である。

閉会挨拶：能仁正顕氏（龍谷大学世界仏教文化研究センター長、文学部教授）

時間：17：25～17：30

誠実な発表をしてくださった登壇者の先生方、終日ご臨席なされた大谷光真浄土真宗本願寺派前御門主、そして聴衆の皆様への感謝の意が述べられた。

以上

（文責：講演・挨拶 唐澤太輔、コメンテーターによる発表 亀山隆彦）



世界仏教文化研究センター設立記念 Hiroshima Peace Memorial

ヒロシマ被爆70年追悼 特別上映

「知られざるヒロシマの真実と原爆の実態」

❖ 日本語概要 ❖

開会挨拶：赤松徹真氏（龍谷大学長、文学部教授）

時間：10：45～10：55

はじめに、赤松徹真学長より開幕の挨拶をいただいた。「1945年8月6日8時15分に広島に原爆が投下され、多くの人々が犠牲になった。その年の死者数は14万人にもものぼった。また、1945年8月9日の長崎の原爆投下によって、その年に約7万人の死没者があり、現在もその被爆者の悲しみや苦しみは続いている。実は、ここ京都も他人ごとではなかった。京都の梅小路車庫も原爆投下場所の一候補地と想定されていたことが記録されているからである。21世紀の世界は今、善と悪との二項対立的な構造になりつつある。今後、そうした二極対立的な考え方を越えて、仏教的な視点から世界平和を構築していく道を考えていくことが必要であるだろう。そのためにも、2015年に第五次長期計画のもとで、世界仏教研究センターが設立された。世界仏教文化研究センターは、仏教伝来の歴史と経論釈の文献を読解する基礎研究部門、仏教を機軸とした国際交流を進めるプラットフォームとしての国際研究部門、さらには現代世界のさまざまな苦悩の解決に向き合い、その課題解決に取り組む応用研究部門の三部門から、その成果を広く世界に発信していくという重要な役割を担っている。本日の特別上映会『知られざるヒロシマの真実と原爆の実態』は、応用研究部門の人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センターによって企画実現したものである。このドキュメンタリー映画をご覧いただき、広島への原爆投下がどのような「現実」であったのかを、しっかりと共に学びたい。ご尽力いただいた映画監督ならびに関係各位に感謝申し上げたい」というメッセージを聴衆に届けた。

【映画監督 田邊雅章氏 プロフィール】

ヒロシマ70プロジェクト代表

1937年、原爆ドームのすぐ東隣に生まれる。8歳の時、原爆に遭い、二日後に入市被爆した。両親と弟が犠牲となり、現在もその遺骨は世界文化遺産「原爆ドーム」の敷地内に

埋まったままである。15歳で記録映画監督を志し一筋に生きている。日大芸術学部映画科卒。還暦を機に史上初の爆心地復元事業に取り組み、17年をかけて6作品を完成した。広島と国連上映などで大きな反響があった。広島市民賞、広島文化賞を受賞し、政府非核特使として活躍している。著書『原爆が消した広島』など。2015年5月にニューヨークの国連本部などで英語版が上映された時、スタンディングオベーションで拍手に包まれた。関西で上映するのは、今回、龍谷大学が初めてである。

映 画：「知られざるヒロシマの真実と原爆の実態」

時 間：11：00～12：02

❖ 映 画 の 概 要 ❖

原爆投下—あの日から70年。CGによって復元された田邊監督の在りし日の生家からは、産業奨励館がすぐ近くに見えていた。監督は、子供の頃、この館でよく遊んでいたという。被爆以前と直後を知る田邊監督は、数少ない生き証人として、その惨劇を語ることが、自分の使命であると語る。そして映画監督として、この地の「復元事業」に取り組むことは、自分の責務であるとも言う。

映画の中では、原爆が投下された時の惨劇が、現在ご存命の被爆者の方々によって、多く語られている。焼けただけの人々が防火水槽に飛び込む様子や、助けを呼ぶ声、体中真っ赤にやけどし髪の毛がすべて逆立っている女性の姿、降り注ぐ黒い雨……、凄惨を極める状況を、ある被爆者の方は「この世の地獄」と表現していた。

田邊監督は、被爆前の広島の街の様子を、CGを用いて再現している。CGによって、和やかな人々の暮らしや賑わう繁華街の様子が、生き生きと甦っていた。一方で、本編を通じて、このような街を一瞬にして消滅させる原爆の恐ろしさを改めて思い知らされた。消滅し、破壊されるのは、街だけではない。そこに息づいていた地域の芸能や歴史、伝統、子どもたちの遊びも失われた。

広島は、川とともに栄えてきた。運搬用の舟が行き交い、またそこは子どもたちの良き遊び場でもあった。憩いと風情の象徴であった広島川。被爆後1年経った夏の日、田邊少年は、この川に飛び込んでみた。川底には、犠牲になった多くの遺骸があったという。

当時広島の花街で働いていた人々の内、1,000人以上が犠牲になったが、それは記録にすら残っていない。また陸軍病院に来ていた見舞いの人々など外来者も多く犠牲になったが、それは「行方不明者」として扱われている。記録はすべて焼き尽くされてしまい、その犠牲者の全容を把握することはできないのが現状なのである。

学童疎開をしていた子どもたちは、「いつか両親が迎えに来てくれる」と信じて待ち続けた。しかし、そのまま農家に引き取られる子どもや浮浪児になる子どもが多くいた。「原爆

孤児」は現在「原爆孤老」となっていることも多いという。原爆による人体への影響は大きく、生き残ったとしても、やけどの跡(ケロイド)が残り、また癌になる確率も高く、そのせいで結婚なども困難になったという。

今でも、平和公園の樹木の下には、粉末状になった遺骨が眠っている。「戦争は悪、原爆は絶対悪」。私たちは、決して“あの日を”忘れてはならない。

対 談：田邊雅章氏×鍋島直樹氏（龍谷大学世界仏教文化研究センター副センター長）

謝 辞：戸田栄信氏（龍谷大学大学院実践真宗学研究科臨床宗教師）

黒瀬英世氏（龍谷大学大学院実践真宗学研究科臨床宗教師）

花束贈呈：井上睦美氏（龍谷大学文学部真宗学科三回生）

笠井景子氏（龍谷大学文学部真宗学科三回生）

時 間：12：05～12：25

❖ 対 談 の 概 要 ❖

映画上映後、田邊雅章映画監督と聞き手の人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター長、鍋島直樹先生による対談が行われた。鍋島先生から「ご両親と弟を原爆で一瞬にして亡くされた悲しみは今もとても深いと思われる。その悲しみの中で、ヒロシマの美しい街並みと被爆の現実を再現する映画が17年もかけてようやく完成したことに心からありがとうございますと伝えたい。監督がこの作品を通じて伝えたいことは？」と語りかけた。田邊監督は「表現者として、作品がすべて。自分自身の体験に置き換えて考えて欲しい」と述べられた。また、鍋島先生から「悲しみや憎しみ、悔しさを感じておられた日々の中で、なぜ憎しみに憎しみを返そうとしなかったのか？」と語りかけた。田邊監督は、「被爆直後は、大切な両親と弟を失い、子ども心に「いつか仇をとろう」と考えたこともあった。しかし、自分にはこの世ですべきことがあるはずと思い、映画を志した。このヒロシマ原爆の映画を製作する時に、多くのアメリカ人が協力してくれた。長い時を経て、憎しみに対して憎しみを返すのではなく、ヒロシマ被爆の映画製作を通じて悲しみを表現し、憎しみを平和への道を築いていきたいと思った。孤児の自分を受け止めてくれた寺院があった。自分にはこの世ですべきことがあるはず、それに向かってどのように生きればよいかについて教えてくれたのは仏様だった。亡くなった両親や弟のお墓にお参りし、仏様に手を合わす中で、憎しみに憎しみを返してはならないと思った。アメリカ人も同じ人間であると思えるようになった」と語った。

最後に、鍋島先生から田邊監督へ、親鸞聖人の教えである「おんしんびようどう怨親平等」と書かれた色紙がプレゼントされた。「怨親平等とは、恨み敵対した者も 親しい人も、偏見を離れてみれば同じ人間、同朋であることを意味する」と鍋島先生から説明されると、その言葉が田邊

監督の平和への気持ちと思い重なって、両手でしっかり受け止めてくださった。

次に、本学学生を代表して、龍谷大学大学院実践真宗学研究科の臨床宗教師である戸田栄信さんと黒瀬英世さんが謝辞を述べた。戸田栄信さんは、「田邊監督のおかげで、ヒロシマ原爆の真実をはじめ身近に感じることができた。これからこのヒロシマ被爆の真実を宗教者としてしっかり受け止めて平和を伝えていきたい」と述べた。黒瀬英世さんは「臨床宗教師研修で鍋島先生と共に広島平和記念公園を歩いた時、この下には数えきれないたくさんの方々の遺骨が眠っていると聞いた。田邊監督のおかげで、ヒロシマの被爆前の美しい街並みや人々の幸せを知り、同時に、原爆の恐ろしさや悲しみを痛切に感じた。この気持ちを伝えていきたい」と感謝の気持ちを込めて話した。最後に、文学部真宗学科 3 回の井上睦美さん、笠井景子さんから、田邊監督へ花束が手渡された。田邊監督は、その学生たちの謝辞を聞いて喜んでくださり、歩み寄って学生たちと熱い握手を交わした。

終わりに、鍋島先生より、この特別上映会のためにご尽力いただいた龍谷大学社会学部教授、新田光子先生、ならびに、参加してくださった仏教の思想担当者の野呂先生、能美先生、佐々木大悟先生、高田文英先生と学生、文学部教義学特殊講義 A の学生、人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター副センター長の黒川雅代子先生、来聴者、スタッフ全員に感謝の気持ちを伝えた。

田邊監督は鍋島先生にも握手を求めた。その時、会場から感謝を込めた拍手がわきおこった。平和への想いが確かに教員や学生たちに伝わった。

❖ 感 想 ❖

被爆者による壮絶な証言からは、悲しみとともに原爆そして戦争の本当の恐ろしさが伝わってきた。一方、被爆前の広島の街の様子の「復元作業」は、そこに生まれ育った映画監督・田邊雅章氏にしかできない仕事であると感じた。同時に、この作業には、相当なつらさが伴うものだったのであろうと推察された。在りし日の生家や遊び場を思い出すことは、被爆直後の惨状を思い出すことにもつながる、精神的にも大変苦しい作業だったのであろう。それをご自身の責務だと捉え活動する田邊監督に、敬意と感謝の意を表さずにはいられない。また、この映画を通じて、改めて平和と命の尊さについて深慮することができた。

以上

(文責：鍋島直樹、唐澤太輔)